

「Post- “War (= 『図書館戦争』)” 時代の 図書館イメージ

テレビドラマ『魔王』『ラブレター』のケースについて

佐藤毅彦

要約

「Post-War」は、「『図書館戦争』以降」の意で、『図書館戦争』のアニメ作品放映以降、図書館のイメージは変化したのかどうか、テレビドラマ『魔王』『ラブレター』をとりあげて検討した。このドラマに登場する女性図書館員は、書架へ本の返却作業をしている場面が、図書館で行っている主な業務の内容であり、図書館現場を映像化する際に、「本」以外の要素を取り入れることが、実質化されにくい状況が、現在も継続していると考えられる。

1. はじめに—『図書館戦争』と「Post-War」時代

小説『図書館戦争』シリーズ⁽¹⁾は、第一作『図書館戦争』(2006. 3)につづいて、『図書館内乱』(2006. 9)、『図書館危機』(2007. 3)、『図書館革命』(2007. 11)、の4点が刊行され、さらにスピンオフ作品『別冊 図書館戦争1』(2008. 4)、『別冊 図書館戦争2』(2008. 8)、が続いて出された。その後、マンガ雑誌に連載された、コミック2作品、『図書館戦争 LOVE&WAR』⁽²⁾、『図書館戦争 spitfire!』⁽³⁾が、それぞれ別冊刊行された。2008年春には、アニメ作品として、テレビ放映され、後にDVDでも1～5巻が(2008. 8～12)が発売された⁽⁴⁾。なお、同じく、2008年には「SF大会参加者のファン投票」によって選ばれる「第39回 星雲賞 2008」「日本長編部門」を受賞している⁽⁵⁾。

『図書館戦争』シリーズの著者、有川浩は、雑誌『ダ・ヴィンチ』2009年5月号⁽⁶⁾に掲載された「有川浩徹底解剖インタビュー」で、「高知市内」に

「3にんきょうだい」の「長女として生まれ」「『小さい頃から本を読むのが好きで、お話を書くのが好きな子供でしたね』『お話を書くことが私にとっての遊びでした』」と述べ、図書館との出会いについては、「小学校に入ってから『図書室に入り浸りましたね～。学校の図書室じゃなくて、まちの図書館というのがあると聞きつけてからは、近所の友達とみんなバスに乗って通いました。図書館デビューは小学校5年生で、地元の市役所の支所に入ってる図書館です』」と、『星へ行く船』をはじめとする新井素子の作品や、コバルト文庫などを読んだことを語っている⁽⁷⁾。また、『図書館戦争』に関連して、図書館関係者との対話の中で「私が書いている『図書館戦争』シリーズは、ある意味、図書館にとっての『夢』なのかも？と思う部分もあるんですよ」「少なくとも『司書資格を取得し、図書館員になる』ということが一般的にもっと当たり前のこととして理解してもらえるようになったらいいな、と思うんです」と述べている⁽⁸⁾。

子どものころに図書館利用経験のあった著者が、「図書館の自由に関する宣言」に刺激をうけて執筆した小説『図書館戦争』シリーズは、2008年に、アニメ作品として放映されたことにより、活字メディアやコミックの読者とは異なる、多数の人々が、その内容にふれることになった。このシリーズは、第一作が刊行された段階から図書館関係者の間でも話題となり、『図書館雑誌』に見解が掲載され⁽⁹⁾、この作品の表現についての図書館情報学的観点からの考察も発表されている⁽¹⁰⁾。また、ストーリーに「図書館の自由に関する宣言」が登場したり、自由を守るためのメインキャラクターたちの対応が、図書館に対する共感をもたらしたことを評価する見方もある。

タイトルに掲げた「Post-War」は、『『図書館戦争』以降』の意で、特に、小説やコミックより多くの人が視聴したと思われるアニメ化の後、図書館のイメージは変化したのかどうか、アニメ『図書館戦争』の放映が終了した、2008年夏以降に、テレビドラマとして放映された『魔王』『ラブレター』をとりあげて検討した。

2. フィクションに描かれる図書館のイメージをめぐる近年の動向

『図書館戦争』は、小説、コミック、アニメ、それぞれが一定の支持を得て、多くの読者・視聴者を獲得した。もちろん、図書館とは全く関係なく、純粹に、フィクションの作品として楽しんだ人たちが多数を占めていると思われる。一方、ストーリーに刺激を受けて、図書館や「図書館の自由」に関心をもつようになったケースもありうる。

『図書館戦争』のアニメ作品が放映された2008年は、図書館法が改正された年でもあり⁽¹⁾、同年、小説では、『僕は落ち着きがない』⁽²⁾『吉野北高校図書委員会』⁽³⁾が刊行された。いずれも、高校の図書部、図書委員会に集まる生徒を中心に描いた作品であり、そこに登場する図書館職員は、20～30代前半の女性で、好意的なイメージで描かれているものの、専門的な知識や技術は少なくともストーリーの流れからは感じ取ることができないキャラクタであった。また、これも同じ2008年に発表された、男性図書館員が登場する作品『決壊』『セルフ』『レファレンス・カウンターの難問』は、従来のフィクションにみられたものとは、異なる図書館員像が描かれている。『決壊』⁽⁴⁾には、国立国会図書館に勤務する人物が、有能な職業人、エリート公務員、という印象のメインキャラとして登場する。また、コミック雑誌『ビッグコミック・スピリッツ』に連載された『セルフ』⁽⁵⁾は、異性にとって魅力のある男性が、図書館に勤務している設定になっている。季刊誌『ジャーロ』（光文社）に、6回にわたって連載された「レファレンス・カウンターの難問」⁽⁶⁾では、毎回、レファレンス・カウンターに持ち込まれる問題に、レファレンス担当の男性図書館員が資料を駆使して対応する一方、行政からの図書館廃止の圧力に対抗して、図書館職員が市議会の文教委員会で、図書館の存在意義について発言する場面があった⁽⁷⁾。

では、2008年に放映されたテレビドラマでは、図書館や図書館員は、どのように描かれたのであろうか。

3. 『魔王』⁽¹⁾

『魔王』は、2008年7月～9月に、金曜、22時～22時54分に、全11回にわたって、TBS 系列で放映された⁽²⁾。このドラマは、2007年に日本でも放映された、韓国ドラマ『魔王』⁽³⁾を、日本人のスタッフとキャストにより、翻案したもので、ストーリーの細部には相違もあるが、基本的な枠組みは同一である。なお、以下の考察に際しては、ドラマの公式サイトにくわえて、それぞれのDVD及び附属資料⁽⁴⁾、韓国ドラマ『魔王』のノベライズ⁽⁵⁾及び『公式ガイドブック』⁽⁶⁾を参考にした。

ヒロインはサイコメトラー「物体に残った残像を読みとる」(TBS『魔王』公式サイト「キャスト」)、「物体・人物への直接接触によって記憶を読み取る」(韓国ドラマ『魔王』公式サイト「キャスト&スタッフ」)能力をもった人物で、図書館に勤務しているという設定になっていた。

TBS『魔王』のヒロイン「咲田しおり」(小林涼子)は、「図書館で司書として働きながら、タロットカフェ「ガランサス」で働いている。本が大好きで、子供の頃から読書家だった。『大好きな本に囲まれ、本を読む楽しみを多くの人に知って欲しい』と司書になる」(TBS『魔王』公式サイト「キャスト」)とされている。この人物を演じる小林涼子は「図書館司書で手袋をして仕事をしているのはかっこよくて、ワクワクしますね」(TBS『魔王』公式サイト「インタビュー vol.3 小林涼子」)と語っている。

韓国ドラマ『魔王』のヒロインは「ソ・ヘイン」(シン・ミナ)で、「職業：図書館司書」「契約職の図書館司書として働き実直で素直な明るい性格で、誰にも先入観なしに対応する寛大さを持った心の優しい女性である」(韓国ドラマ『魔王』公式サイト「キャスト&スタッフ」)「図書館司書。手に触れたものの残像や記憶を読みとる能力を持つ」(ノベライズ『魔王(上)』「登場人物紹介」p.5)とされている。また、この役を演じたシン・ミナは、撮影に際して、「図書館司書として働くときは、動きやすい服で、彼女の性格は明るいので、明るめの色を中心に、私の好みとスタイリストの意見を調整しながら選びました」(「Special Interview シン・ミナ」『韓国ドラマ 魔王 公式ガイドブック 上巻』p.32)と述べている。

TBS『魔王』は、タイトルバックに流される画像や出演者の名前も男性2人（大野智・生田斗真）が強調され、DVD ケース写真にも2人しか写っておらず、サイコメトラーであるヒロインの存在感が小さい。韓国ドラマ『魔王』では、タイトルバックの映像に3人が同程度の存在感で登場し、男性2人＋女性の3人がメインキャラであると感じられる。また、DVD ケース写真にはⅠ・Ⅱとも、女性（シン・ミナ）を中央に、男性2人が両側に配されている。

TBS『魔王』では、「司書」という言葉は、放映されたドラマでは使われていないが、「DVD ボーナストラック 特典 DISC 2」で「ドラナビ完全版」のナレーションで、小林涼子が演じる「咲田しおり」について、「ふれたものから記憶を読みとるサイコメトラー」「図書館で司書として働くしおり、裁判の資料を探しにやってきた領（引用者による注：主要な登場人物である弁護士の役名）に特別な何かを感じてしまう」と紹介されている。なお、過去に「司書」ということばが、テレビドラマに使用されたケースとして、2000年にTBS系列で放映された『ビューティフルライフ』で、「あたししがない図書館司書だし」「そんなこと、全然思っていないでしょう、ねえ。図書館司書ってさあ、案外むずかしいんでしょ」（第5回）という主役ふたり（常盤貴子・木村拓哉）の会話があった⁽⁷⁾。

韓国ドラマ『魔王』では、図書館を訪れた、オ・スンハ（主要な登場人物である弁護士の韓国ドラマでの役名）と図書館司書役のソ・ヘインが「『図書館の仕事はいいですね。定時に帰れるから』『時間通りに帰れなくても正社員の方がいいわ』『正社員じゃなかったんですか？』『契約社員なんです。だからいつクビになるかわかりません』」のような会話をしているシーンがある（ノベライズ『魔王（上）』p.136）。また、ノベライズでは、ドラマの終盤にヘインがスンハに話す内容として「図書館にやってくるさまざまな人の話。司書の仕事は意外に重労働なのだという話」（ノベライズ『魔王（下）』p.260）とある。このノベライズは、おおむね放送された内容と同一のものだが、この場面に関しては、DVD で発売されているテレビドラマでは、このような会話は無い。

TBS『魔王』の図書館でのシーンは、神奈川県内の秦野市立図書館で撮

影され、第10回と第11回（最終回）のタイトルロールに「撮影協力 秦野市立図書館」と表示される。一方、韓国ドラマ『魔王』は、大学図書館で撮影されている⁽⁸⁾。

以下、この章では、TBS『魔王』について、図書館員の描かれ方を取り上げて分析し、折にふれて韓国ドラマ『魔王』についても扱うこととする。

第1回、館内で、ブックトラックを押す咲田しおり、白い手袋をして書架へ返却作業をしているところへ、弁護士の成瀬領が現われ、成瀬「建築関係の専門書を探しているんですが」しおり「あ、それならこちらです。どうぞ」（書架間の通路を案内する）しおり「失礼ですが、建築関係のお仕事なさってるんですか」成瀬「いえ、弁護士です」しおり「えっ、弁護士さん？」成瀬「どうかしました」しおり「あ、いえ。弁護士さんって、みんなおじさんだとおもってました」成瀬「そんなことないですよ」しおり「アハハ」という対話がかわされる。カウンターへ移動し（上に「かりるところ」と表示がある）、コンピュータで貸出手続きをしながら、しおり「返却は2週間後です。2・3日ならおまけますけど」成瀬「ありがとう」しおり「あの」成瀬「はい」しおり「以前どこかでお会いしませんでしたか？」成瀬「僕とですか」しおり「いえ、すいません。気のせいかも」成瀬「では、また」しおり「はい」というシーンがある⁽⁹⁾。

その後、別の日に、図書館の書架手前で、新潮文庫『ファウスト』を成瀬が読んでいるところへ、しおりが、百合の入った花瓶を手に現われ、それをカウンターに置く。成瀬「きれいな百合ですね」しおり「成瀬さん、いらしてたんですか」成瀬「ええ、懐かしいな」しおり「百合の花に何か思い出でも」成瀬「母が好きで、子供の頃、必ず家にありました」しおり「そうなんですか。私も大好きなんです。夏のおいがします」というのが第1回で放送された内容で、全体を通して、この回で図書館のシーンが最も多く、以降は断片的に出てくるのみであった。

第2回では、しおりが、図書館でブックトラックを押しながら、百合の花に目をとめ、成瀬を思い出す。直後に、記憶の残像がフラッシュするシーンがあり、館内を振り返るが誰もいない。しおりが、手袋をとって残像を読み

とろうとしているところへ、足音がして、成瀬「こんばんは」しおり「成瀬さん」成瀬「どうしたんですか」しおり「いいえ、その後、図書館の外に出て、成瀬がしおりを家まで送る。

第3回では、芹沢刑事がサイコメトラーであるしおりに事件の関係物品について残像読み取りを依頼し、図書館までしおりを送っていく。この時、建物の玄関前に、「目黒区立駒場中央図書館」という架空の図書館の看板が映る（建物は、レンガ外壁）。

第4回では、夜の図書館で、しおりが、白い手袋をして返却作業をしていると、書架の向こう側に芹沢刑事が現われ、過去のできごとについて、芹沢刑事「様子は俺を許してくれるんですかね。あの中学に通ってた頃、俺はとんでもないヤツでした」といって、罪を告白し、懺悔しているシーンがあり、芹沢刑事「あなたに隠し事はしたくなかったので」しおり「生きなきゃいけないですよ」という対話がある。

第5回では、しおりが、図書館から芹沢刑事に携帯で連絡をとり、しおり「わかったんです、あの333という数字が何か」芹沢刑事「ほんとうですか。すぐ行きます」という会話のあと、刑事が図書館にやってくる。（図書館で刑事を書架に案内する）⁽¹⁰⁾しおり「ここです。確かに、この数字でした」（「333 イタリア文学」⁽¹¹⁾という表示が映る）芹沢刑事は、本にはさまれた、自分宛の赤い封筒にタロットカードを発見し⁽¹²⁾、しおりは、図書館内でカードの残像を読み取る。

このあとは、図書館内での撮影シーンはない。韓国ドラマ『魔王』では、刑事や弁護士がしおりを訪ねて、図書館にやってくるシーンが後半にもあるが、TBS『魔王』では、同様のストーリー進行の場面でも、しおりが、弁護士事務所や、警察へ出向くシナリオになっている。

科学的な立証が困難である、サイコメトラーの存在を前提とするストーリーに「図書館や図書館員についての現実感の乏しさ」を指摘してもあまり意味がない。TBS『魔王』で、ヒロインでサイコメトラーでもある「咲田しおり」が図書館員に設定されているのは、韓国ドラマ『魔王』の設定をそのまま踏襲していることによるもので、それ以上の積極的な意味を見出すのは困難である。ドラマの冒頭の場面で、教会横の施設でしおりが子どもたちに絵本を

みせているシーンがあり、しおりのキャラクタについて「本が大好きで、子供の頃から読書家だった。『大好きな本に囲まれ、本を読む楽しみを多くの人に知って欲しい』と司書になる」(TBS『魔王』公式サイト「キャスト」)とあることから、「本・読書好き＝図書館員」というイメージが視聴者に共有されるであろうと、ドラマの製作者が考えているといえるのではないか。

4. 『ラブレター』⁽¹⁾

TBS「愛の劇場」は40年間にわたって放映され、「一貫して“愛”の物語を贈り続けてきた」(『ラブレター』公式サイト「みどころ」)とされる。中には、『温泉へ行こう』『大好き!五つ子』のように、同一のキャストによりシリーズ化された作品もあった。2009年春の改編により、TBS全体の編成が大幅に変更され、放送枠は消滅、シリーズは幕を閉じた。「愛の劇場40周年記念」番組として、2008年11月から2009年2月にかけて、月～金、13時～13時30分、全60回にわたって放映されたのが『ラブレター』である⁽²⁾。以下の考察に際しては、放映されたテレビドラマ、番組の公式サイト、ノベライズ『ラブレター』を参考にした。

「舞台は美しい瀬戸内の島・小豆島。施設で育てられ小豆島へやってきた聴覚障害のある少女美波が里親や一生の友人、初恋の人・海司と出会い、成長していく15年間を描く」(『ラブレター』公式サイト「みどころ」)というストーリーで、メインキャストの田所美波と塚越海司については、小学校時代は、松嶋友貴奈・桑城貴明、中高生時代は、山下リオ・村上一志、大人時代は、鈴木亜美・田中幸太郎、が演じている。

中学を卒業した美波は、島を離れることになり、自分たちのこれまでのエピソードを「耳が聞こえないブタさんと友だちのサルくん」をキャラクタにして、絵に描き、本のようにひもでとじた冊子を手作りして、海司に、プレゼントする⁽³⁾。やがて、美波は、東京の美大へ進学、海司と再会し、在学中に開催することになった自らの絵の個展に招待する。ところが最終日、約束していた海司が会場に現れなかったことに大きな衝撃をうけ、絵を描かなくなってしまふ。

そこから5年が経過し、美波は図書館で働いている。学生時代に絵の個展を開くほど、絵を描くことや、絵本に強い関心があったことから、絵本となにかしらつながりのある仕事＝図書館、ということが背景にあつての設定と思われる。ドラマの後半（第56回）で、美波は絵本を出版するのだが、それでも、「図書館の仕事はつづけるの？」と尋ねられて、美波はうなずき、「本に囲まれてるの好きだもん」と手話で対応している⁽⁴⁾。このドラマでは「司書」という言葉は出てこない。

なんらかの障害をもつ人物がメインキャラクターとなっているドラマは、これまでも多数あり、その人物が図書館につとめているという設定のものも放映されている⁽⁵⁾。「1993年から2005年までの13年間に放映された民間放送（地上テレビ）の連続ドラマ」を分析対象とした「TVドラマに描かれる障害者像の分析」では、「車椅子とか視覚障害など映像化しやすい障害は描かれやすい」「聴覚障害者の多くは（さらに周りにいる人たちも）当然のように手話を使う」「知的障害者や自閉症患者が特殊な才能（絵や音楽の才能など）を持っているといったステレオタイプ化された描かれ方も目につく」などの点を指摘し、「テレビドラマはフィクションであるが、視聴者の多くは日常生活で障害を持った人たちと身近で親しく接触する機会は必ずしも多くなく、障害者イメージ形成にテレビの描写が大きな役割を果たしていると考えられるため、ドラマだから非現実的描写でもかまわない、ということにはならないだろう」と述べている⁽⁶⁾。

『ラブレター』で、図書館を背景とするシーンは、東京都下の福生市立中央図書館で撮影され、タイトルバックの「ロケ協力」に表示されている。福生市では「フィルムコミッション事業への取り組み」として、撮影支援を行っており、福生市のホームページで、「1月下旬から連日のように図書館が登場しました。主演の鈴木亜美さんをはじめ、多くの出演者の方が中央図書館を訪れ、熱演を繰り広げました」「最終回の山場となるシーンのほか、ドラマのキーポイントとなるシーンが幾つも撮影されました」とされ、番組の美術担当者が作成した「世田谷区立あおば図書館」という架空の図書館の看板を写真で紹介している⁽⁷⁾。

『ラブレター』は、2008年11月から2009年2月にかけて、全60回放映されたが、図書館が関係するのは、ストーリーの後半である。第41回では、美波が、図書館で書架に返却作業をしながら、モノローグで「あの別れの日から5年、わたしは新しい生活を送っていた」「絵本作家をあきらめたほんとの理由は、誰にもいってなかった。絵を描かなくなったのは、見せたい相手がなくなったから」というシーンがある⁽⁸⁾。

このドラマで、美波が登場する図書館でのシーンは、ブックトラックの本を書架に返却している作業をしている場面が多く(第41回・第42回・第43回・第45回・第46回・第55回・第60回)みられる。それ以外でなにか作業をしているのは、コンピュータの画面を前に処理作業をしている(第47回・第51回・第52回)場面があるくらいで、図書館業務のイメージが限定されたものになっている。

利用者への対応をしているシーンは、第42回で、カウンターに座っている美波に利用者の青年が「すみません、うるさいんだけど」と申し出て、フロアにいてみると、女の子が泣いている。近くにいた男の子(じゅうたんコーナーに靴のまま上がりこんでいる)から絵本をとりあげ、女の子に手渡すと、男の子「何だよ、おばさん」美波(筆談)「お姉さん!」男の子「だから何でしゃべんないの」女の子「お姉ちゃんはね、しゃべらないんじゃないの」というやりとりがある。

また、自分とおなじ聴覚障害の女の子に対応している場面がある。第56回で、小豆島時代からの友人であり、成人して医者になった小金井陸が、図書館に耳の聞こえない女の子を連れてやってきて、「美波ならヒントをあげられると思って」と伝えると、美波は手話で「まかせて」「先生の友達です。私も聞こえないの」「音が見える本だよ」と、自分が出版した絵本を紹介する。

ドラマの中で、プライベートな事態に図書館で対応している場面が何度かでてくる。美波は、幼なじみの海司とすれちがいが生じ、おなじく小豆島からつながりのある陸とつきあうようになる。第46回で、図書館にやってきた陸は、一日遅れの誕生日プレゼントを美波に手渡し、児童コーナーの机・いすにふたりで座って話し込む。また、このふたりの関係は、結局破談になるのだが、第53回では、図書館に訪ねてきた陸の父と美波が事務室で対話(一

部手話) をしている。その後、第55回では、書架の間に陸があらわれ、手話で「久しぶり」「またここに来てもいいかな。おれたちは大切な友達だろ。ずっと友達でいような」と伝えたのに対し、美波がうなずくというシーンがある。

第60回(最終話)のクライマックスシーンも、美波が図書館でブックトラックを押し、書架への返却作業をしているところからはじまる。大きなガラス窓の外に海司の姿があらわれ、海司はガラス窓の外から、美波に「おれはお前がおらんとあかん」「おれはお前が必要なんや」と手話で伝える。このとき、美波は、勤務時間中だが、手話なので、その場にいる他の利用者に伝わることはない。図書館内に駆け込んでくる海司に対して、うなずく美波、図書館内の書架の間で抱きあう。ふたりの気配を察した男性利用者は書架から身を乗り出して様子をうかがい、母子連れの母親の方もそちらを注目する。利用者から見られてるのに気付いて、美波と海司はふたりで苦笑する。

図書館は、美波の職場であるわけだが、そこにこれだけ多くのプライベートなやりとりが持ち込まれているシナリオが採用され、そのまま放映されているということは、職場が図書館なら、こういうストーリーを進行しても視聴者に不自然とは受け止められないだろう、とドラマの製作者が考えていることを示している。

第47回では、小豆島で美波の養母が入院したことを友人に知らされ、美波はすぐに帰省する。養父に「仕事休んできたんか」と尋ねられ、美波は「びっくりしたから、一週間も休みもらっちゃった」と手話で対応する。親の病気という深刻な理由ではあるものの、図書館の仕事を、突然一週間休んでも特に大きな問題は生じない、という設定になっている。第47回の後半では、登場人物の会話に「不況で商売も大変」という発言もあるが、そうしたことと、図書館の仕事を突然一週間休むこと、との関係性は全く意識されていないようにみえる⁽⁹⁾。

第56回は、美波のモノローグ「夢を現実にしようとしていた」ではじまる。表紙に「さく・え たどころ みなみ」とある絵本が出版され、友人の陸に「絵本の出版、おめでと。美波の夢がかなったね」と祝福される⁽¹⁰⁾。陸に「図書館の仕事は続けるの」と尋ねられ、美波は、うなずき、手話で「本に囲まれてるの、好きだもん」と伝えている。

このドラマのヒロイン、田所美波は、絵本作家をめざしていたが、幼なじみの海司とすれ違いが生じたことで、気力を喪失し、絵を描かなくなってしまふ。美波は、図書館につとめることになるが、働く場として図書館が選ばれていることについては、「本が好き」ということ以外に積極的な意味は見出しがたい。図書館は、美波の職場であるが、また、誰でも利用者としてやってくるのが可能な場所でもある。そこで、プライベートな対応が多くなされているという理由の一つは、それほど忙しい職場ではないと、みられていることであろう。

このヒロインは、聴覚障害のため、他者とのコミュニケーションは、手話や筆記を介してのものになる。第60回（最終話）での手話によるプロポーズは、感動的なシーンであるが、「図書館」で「勤務時間中」、という設定であるだけに、他の職場で同じようなストーリーが成り立つのか、と考えさせられる面もある。

5. 「Post-War」時代の図書館イメージ

——図書館はどうみられてきたか⁽¹⁾

かつて、長谷部史親は、日本の推理小説で図書館を利用する例が少ない理由として「日本の図書館は、ややもすれば学術的な調査研究機関としての機能と、読物から漫画、ビデオ、CDなどを貸し出す機能の二極に分化している傾向があり、それ以外のたとえば社会生活に関する情報提供機関としての機能があまり期待されていない」と述べていることを紹介したが⁽²⁾、そうした事態は現在も継続し、さらにその傾向が強くなっているのではないか。

大多数の大学図書館と、一部の専門図書館や公立図書館などでは、調査研究のための情報源が電子メディアへ移行しつつあることを背景に、コンテンツの電子化に対応した従来とは異なる新しいかたちサービスが提供されている。それは、大学図書館による調査研究支援が、大学の存在意義そのものにかかわることにとも関係があるろう。一方、より身近な存在である、主に中小規模の公立図書館は、設立時期による違いはあるものの、印刷メディア（図書・雑誌・新聞など）の提供を、サービスとして継続してきている。資料提供に

関係する業務を処理するためには、コンピュータが活用され、資料の検索や予約申し込みなどは、インターネットを通じて web から行うことが可能になっても、コンテンツの多くは印刷メディアで提供されている。

テレビドラマでの職業の扱いは、時代的な制約の元にあり、現代において、図書館を映像化する際に、図書、書架、閲覧スペースの家具（机・いす等）以外に、コンピュータが新しく加わったくらいで、図書館での新しいサービスの状況を映像に反映させることが困難であるともいえる。

今回取り上げたテレビドラマでは、『『大好きな本に囲まれ、本を読む楽しみを多くの人に知って欲しい』と司書になる』（TBS『魔王』ホームページ「キャスト」）、「本に囲まれてるの好き」（『ラブレター』第56回、美波のせりふ）、などにみられるように、図書館に勤務する人物を映像化する際、「本」以外の要素で、視聴者に共有されているものを、ドラマの製作者がみだしえていない、ともいえるのではないか。近年の図書館に導入されている、これまでにない目新しい機器としては、自動貸出機、自動書庫などもあるが、必ずしもまだ、一般的ではない。利用者用インターネット端末も、2000年前後から、公共図書館にも普及はしつつあるが、数十台以上のインターネット接続コンピュータを備えた公共図書館は、全体から見れば、限られた数である。

テレビドラマでは、『阿修羅のごとく』（1979）から『素顔のまま』（1992）『ビューティフルライフ』（2000）『いま、会いにゆきます』（2005）『白夜行』（2006）と『魔王』（2008）『ラブレター』（2008）の間に20年以上の経過しているが、図書館や図書館員の描かれ方に大きな変化があったとは、いいがたい。「Post-War」時代、『図書館戦争』は、一定の刺激を与える存在ではあったが、その影響はどこまで及んでいるといえるのか。本稿で取り上げた、テレビドラマ『魔王』『ラブレター』の図書館員は、いずれも女性だが、図書館の存在そのものが、ストーリー全体の中で重要なものとなっていないこともあって、図書館員としての存在感やイメージがさほど強く印象に残るものではなかった。

注

1. はじめにー『図書館戦争』と「Post-War」時代

有川浩『図書館戦争』メディアファクトリー、2006

有川浩『図書館内乱』メディアファクトリー、2006

有川浩『図書館危機』メディアファクトリー、2007

有川浩『図書館革命』メディアファクトリー、2007

有川浩『別冊 図書館戦争1』メディアファクトリー、2008

有川浩『別冊 図書館戦争2』メディアファクトリー、2008

- (1) 文芸評論家の齊藤美奈子は『図書館戦争』について、「テレビドラマの『アテンションプリーズ』と宗田理『ぼくらの七日間戦争』（角川文庫）とを足したような印象」と記している。

齊藤美奈子『文芸誤報』朝日新聞出版、2008、p.133 初出は、『週刊朝日』2006. 08. 18-25

- (2) 弓きいろ、有川浩『図書館戦争 LOVE&WAR』第1巻、白泉社、2008. 4

弓きいろ、有川浩『図書館戦争 LOVE&WAR』第2巻、白泉社、2008. 8

弓きいろ、有川浩『図書館戦争 LOVE&WAR』第3巻、白泉社、2009. 3、

- (3) ふる島弥生、有川浩『図書館戦争 spitfire!』01、メディアワークス、2008. 6

- (4) フジテレビでは、2008年4月10日から、木曜深夜に、12回にわたって放映された。フジテレビ系列のほかのテレビ局でも順次放送されたが、放送日は、各局により異なっている。DVDは、1～5巻が、2008. 8～12にかけて、発売された。

- (5) 星雲賞は「日本のSF及び周辺ジャンルのアワードとしては最も長い歴史を誇るSF賞です」「前年度に発表された作品の中から、SF大会参加者のファン投票により最優秀作品を選ぶものです」とされている。

出典は、日本SFファングループ連合会議 (<http://www.sf-fan.gr.jp/>)。

- (6) 『ダ・ヴィンチ』2009年5月号は、「有川浩徹底特集」(pp.204-215)を

掲載しているが、そこでは「弊誌ブックオブザイヤー2008恋愛小説部門でも上位を独占」と紹介されている (p.205)。特集記事の中で「有川ワールドなんでもランキング」は「ダ・ヴィンチ読者および mixi の『有川浩』コミュニティの、下は14歳から上は74歳まで幅広い年齢層の方々にご協力いただきアンケートを集計」した結果を掲載している。「好きな作品 BEST10」では、『図書館戦争』が1位なのをはじめ、『別冊 図書館戦争 1』3位、『図書館革命』5位、『別冊 図書館戦争 2』8位、にランクインしている。また、「好きなキャラ BEST10」では、堂上篤1位、笠原郁2位、柴崎麻子3位、小牧幹久4位、手塚光9位、「好きなカップル BEST10」でも、堂上×笠原1位、手塚×柴崎2位、小牧×中澤4位、源田×折口7位、と『図書館戦争』に関係したキャラクターがいずれも上位となっている (p.209)。

- (7) 「有川浩徹底解剖インタビュー」『ダ・ヴィンチ』2009. 5、pp.210-215
- (8) 有川浩、手嶋孝典、東條文規、真々田忠夫「『自由宣言』は勇ましい！『図書館戦争』シリーズの作家・有川浩さんに聞く図書館のこと、小説のこと。」『ず・ぼん』No.13、2007. 11、pp.148-175
- (9) 『図書館雑誌』2006. 12、pp.816-817、では、「特集★2006・トピックを追う」の中で、『図書館戦争』の刊行についてふれている。
- (10) 藤間真「『図書館戦争』における非暴力的戦いについての考察」『環太平洋研究 第9号』桃山学院大学総合研究所、2008、pp.213-229
藤間真、家瀬淳一、志保田務「『図書館戦争』シリーズの表現に関する図書館情報学的考察」『図書館界』vol.60、no.2、2008. 7、pp.142-152 などがある。

2. フィクションに描かれる図書館のイメージをめぐる近年の動向

- (1) ここで紹介した作品については、下記で論じた。

佐藤毅彦「図書館法改正と『メディアの中の図書館のイメージ』 法改正の年に文学作品に描かれた図書館は？ 事例研究 「レファレンス・カウンター」の難問」を中心に「一図書館はどうみられてきたか・10」『甲南

女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.45、2009. 3、pp.1-13

- (2) 長嶋有『ぼくは落ち着きがない』光文社、2008
- (3) 山本渚『吉野北高校図書委員会』メディアファクトリー、2008
- (4) 平野啓一郎『決壊（上）』新潮社、2008
平野啓一郎『決壊（下）』新潮社、2008
- (5) 朔ユキ蔵『セルフ』①、小学館、2008
朔ユキ蔵『セルフ』②、小学館、2009
- (6) 門井慶喜「レファレンス・カウンターの難問」『GIALLO（ジャーロ）』
 - ①「図書館ではお静かに」『GIALLO（ジャーロ）』vol.29、2007. 10、pp.156-171
 - ②「赤い富士山」『GIALLO（ジャーロ）』vol.30、2008. 1、pp.148-167
 - ③「図書館滅ぶべし」『GIALLO（ジャーロ）』vol.31、2008. 4、pp.282-303
 - ④「ハヤカワの本」『GIALLO（ジャーロ）』vol.32、2008. 7、pp.308-330
 - ⑤「最後の仕事」（前編）『GIALLO（ジャーロ）』vol.33、2008. 10、pp.128-146
 - ⑥「最後の仕事」（後編）『GIALLO（ジャーロ）』vol.34、2009. 1、pp.100-117

なお、単行本は、2009年5月末時点では、刊行されていない。

- (7) 2008年12月『カレントアウェアネス』に発表された「『男性図書館員』の肖像」で、国立国会図書館職員の河合将彦は、男性図書館員について、「統計データ、研究対象としての図書館員、フィクションで描かれる図書館員像という3つの視座から」概観している。

河合将彦「CA-1674『男性図書館員』の肖像」『カレントアウェアネス』No.298、2008. 12. 20 (<http://www.current.ndl.go.jp/cal674>)

3. 『魔王』

- (1) TBS『魔王』公式サイト (<http://www.tbs.co.jp/maou2008/>)
- (2) このドラマは、『日刊スポーツ』(<http://www.nikkansports.com/>)

第12回ドラマグランプリ、『TVnavi』(<http://www.tvnaviweb.jp/>) 第5回ドラマオブザイヤー、『TV LIFE』(<http://www.tvlife.jp/>) 第18回ドラマ大賞、で、いずれも作品賞他、複数の賞を受賞している。

ジャニーズ系グループ「嵐」のリーダー、大野智が、テレビドラマで初の主演を演じたことでも、人気を集めた。

平均視聴率は、11.4% (ビデオリサーチ：関東)。

初回は15分拡大版。また、他の番組との編成上の関係で、午後10時よりも、遅れて放送開始になった回もあった。

- (3) 韓国ドラマ『魔王』公式サイト (<http://www.so-net.ne.jp/adv/DevilEmpress/>)

- (4) DVD TBS『魔王』本編1～6＋特典 DISC 1～2

DVD 韓国ドラマ『魔王』I 本編1～5

DVD 韓国ドラマ『魔王』II 本編1～5＋特典 DISC 1

- (5) 韓国ドラマ『魔王』のノベライズは、文庫本で刊行されている。

キム・ジウ：著、蒔田陽平：ノベライズ『魔王（上）』双葉社、2008

キム・ジウ：著、蒔田陽平：ノベライズ『魔王（下）』双葉社、2008

- (6) 『韓国ドラマ 魔王 公式ガイドブック 上巻』TOKIMEKI パブリッシング、2008

『韓国ドラマ 魔王 公式ガイドブック 下巻』TOKIMEKI パブリッシング、2008

- (7) テレビドラマ『ビューティフルライフ』については、下記で論じた。

佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討—図書館はどうみられてきたか・2—」『甲南女子大学研究紀要』vol.37、2001. 3、pp.105-135

また、映画『さよならこんにちは』（1990）では、図書館を利用者として訪れた男性（佐野史郎）が、別の場所で出会っていた女性（南果歩）と再会する場面がある。その後、「おっどろいた、君がこの図書館の司書だったなんて」「がっかりした?」「ううん、本も意外に役にたつんだ」という対話がある。

- (8) TBS『魔王』特典 DISC 1 (TBS『魔王』DVD 附属資料)「メイキン

グ DVD No.1」は、図書館での撮影状況を紹介している。ヒロインの小林涼子が、「図書館でクランクイン」というシーンで、あいさつしているが、特に、図書館への言及はない。

韓国ドラマ『魔王』は、江南大学図書館で撮影されたことが紹介されている(『韓国ドラマ 魔王 公式ガイドブック 上巻』TOKIMEKI パブリッシング、2008、p.97)。

- (9) 韓国ドラマ『魔王』で、ソ・ヘインが勤務する図書館での最初のシーンは、他の利用者に財布を盗まれたと主張する女性利用者の残像をよみとって、落とした財布を見つける場面。ヘインは、財布を盗んだと疑われた男性が絵本を読んでいるのを見て、「絵本が好きな人ってたいていい人なんです」(ノベライズ『魔王(上)』pp.10-12)といている。
- (10) 韓国ドラマ『魔王』では、ノベライズ『魔王(上)』p.311、で、ダンテ『神曲』が紹介され、同書 p.314で、『神曲』の本の中に封筒が発見される。
- (11) 『魔王 Premium booklet ~ Epilogue ~』(TBS『魔王』DVD 附属資料ブックレット) p.33、には、「実は日本でイタリア文学の図書番号は『971』なんです」とあり、実際のNDC(日本十進分類法)での「イタリア文学(詩歌)」の分類番号は「971」であることが示されている。同書では、それにつづけて「この数字、『神曲』『地獄の門』と樹っても切れない縁があるのです」と解説されている。
- (12) 韓国ドラマ『魔王』では、「オスはヘインに訪ねた。『この本、最後に借りた人は誰ですか?』『誰かが自分で置いていった本ですね。返却された本なら私たちが整理するので、封筒が入っていればすぐにわかります』」というシーンがある(ノベライズ『魔王(上)』p.317)。

4. 『ラブレター』

- (1) 『ラブレター』公式サイト (<http://www.tbs.co.jp/ainogekijyo/loveletter/>)
- (2) このドラマのノベライズに、次のものがある。
藤井清美、渡辺啓、松田裕子『ラブレター』汐文社、2009
なお、ノベライズは、中学生時代までの、小豆島での美波と海司を中心

に描かれている (pp.5-133)。美波が東京に出て、美術大学に進学、図書館に勤め、最後に海司と結婚するまでのストーリーは、かなり簡略化されている (pp.134-163)。

- (3) ノベライズでは、「海司の誕生日プレゼントに絵本を手作りした」「耳が聞こえないブタさんと友だちのサルくんの絵本だ。モデルは、もちろんわたしと海司だ」(p.136)となっている。
- (4) ノベライズでは、「わたしは、図書館で働いていた。本当は、大好きな絵本を作る道に進みたかった。でも、海司がいなくなってから、わたしは絵を描くのをやめた。理由は一つしかない。絵を見せたい相手がいなくなったから・・・」(p.146)、とある。

「本に囲まれて仕事」をすることと、「図書館ではたらく」ことの関連について、雑誌『ダ・ヴィンチ』では、「特集 好きな本に囲まれて仕事したい! 図書館ではたらく。」2005. 8、pp.197-203、を掲載している。これについて、以下で触れている。

佐藤毅彦「図書館員出身作家のメンタリティ 女性作家が描く女性図書館員像—図書館はどうみられてきたか・7—」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.42、pp.65-81

また、同じく、雑誌『ダ・ヴィンチ』には、「特集 いとしい奇跡に出会う場所—図書館で、恋をする。」2009. 4、pp.63-69、が掲載されている。

- (5) なんらかの障害をもつ人物が、メインキャラクターとなっているテレビドラマは、かつて野島伸司の関係した『星の金貨』『愛しているといってくれ』などをはじめとして多数のものがある。

『ラブレター』において、聴覚障害のある美波が図書館に勤務しているという設定は、TBS で放映されたテレビドラマ『ビューティフルライフ』(2000) で、常盤貴子が演じた「車椅子で図書館に勤務している女性職員」の例を思い出させる。『ビューティフルライフ』については、以下で触れた。

佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討—図書館はどうみられてきたか・2—」『甲南女子大学研究紀要』vol.37、2001. 3、pp.105-135

また、テレビドラマ『いま、会いにゆきます』は、精神面・体調面が不

安定状態にある男性が図書館に勤めている設定になっている。『いま、会いにゆきます』については、以下で触れた。

佐藤毅彦「2005年の図書館“員”像 ベストセラー小説のテレビドラマ化で図書館はどのように描かれたか 『いま、会いにゆきます』『白夜行』のケースについて」『同志社図書館学年報』2006、vol.32（別冊）、pp.17-43

- (6) 齊藤慎一、石山玲子「TV ドラマに描かれる障害者像の分析」放送文化基金『研究報告』平成15年度助成・援助分（人文社会）pp.1-3 (<http://www.hbf.or.jp/>)

- (7) 東京都福生市公式ホームページ (<http://www.city.fussa.tokyo.jp/>)

「撮影は朝7時頃から図書館の休館日に行われました」とある。

福生市立中央図書館は1980年に竣工された。福生基地があることから、防衛庁の補助金などにより手厚い防音構造がとられたことが、建設当初話題となった。

- (8) 藤井清美、渡辺啓、松田裕子『ラブレター』汐文社、2009、p.146

- (9) 『ビューティフルライフ』では、常盤貴子演じる図書館員が、アメリカ西海岸へ突然旅行に行ってしまう。兄が心配して、自分も家の仕事を休んでついていけばよかったといったのに対して父親は「じょーだんじゃないよ。2週間も店あけられたら、こっちは区民図書館じゃないんだから、あがったりだよ」と対応している。このシーンについては、下記を参照。

佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討—図書館はどうみられてきたか・2—」『甲南女子大学研究紀要』vol.37、2001、3、p.118

- (10) ノベライズでは、『音が見える絵本 サルクんとブタさん』が出版された。わたしの初めての絵本だ。むかし海司のために描いた絵本が、何年もたってから、こうして本になった」(p.153)、とある。

なお、このエピソードもとにした絵本が、実際に製作され、発売されている。

さく・え たどころみなみ『さルクんとブタさん 音が見える絵本』汐文社、2009

5. 「Post-War」時代の図書館イメージ

- (1) 「図書館はどうみられてきたか」というタイトルは、アン・ハドソン・ジョーンズ編著、中島憲子監訳『看護婦はどうみられてきたか 歴史、芸術、文学におけるイメージ』時空出版、1997、を参考している。ただ、病院であれば、その機能は、身体の回復にあるという共通理解が、定着しているといえるが、図書館では、図書館機能そのものの受け取られ方が多様であることを考慮し、「図書館員」ではなく「図書館はどうみられてきたか」としている。
- (2) 長谷部史親『推理小説に見る古書趣味』図書出版社、1993、pp.61-62
日本のミステリと図書館については、下記で扱った。
佐藤毅彦「図書館はどうみられてきたか 日本のミステリと図書館員—東野圭吾・法月綸太郎のケースについて—」『甲南女子大学研究紀要』vol.36、2000、3、pp.155-179
(本文中で参照したサイトは、2009年5月の時点で公開されていた内容です。)

(さとう たけひこ。2009年6月2日受理)